

## 2 部経済学科Ⅱ

### 出会いと新たな一歩へ

松村 健一郎

私は藤井先生やゼミの皆に出会えて本当に感謝しています。私が就職活動を始めたのは、2007年10月で、終わったのは2008年8月で約一年間という長い就職活動期間でした。その中で支えになったのが、藤井先生やゼミの皆が励ましていただいたおかげで内定をもらえたと思っています。

企業の採用担当者が求めているのは、コミュニケーション能力や今までどんな困難を乗り越えたかという経験だといえます。ゼミや就職活動はその役に立つので、あきらめないで。

もしかしたら、ゼミや就職活動は無理だ、あきらめようと決めるのは自分だけ、何もしないよりも、やってみたいことになんでも試して、自分を信じてみるといい。卒業論文を書く当初、私は藤井先生に「松村には卒業論文を書けない」と言われたことを覚えています。しかし、何事も一生懸命になれば、必ず卒業論文はできると信じていました。その結果、卒業論文を完成することができ、自分でも驚いています。卒業論文を完成できたのは、先生やゼミの皆のアドバイスがあったから不可能だと思っていたことが可能になったのです。

就職活動も同じように、あきらめずに行動するのみです。きっと諦めなければ、認めてくれる企業は必ずあるはず。私は100社以上の内、5社ほど内定を貰いました。自分が入社して困難を乗り越え、人が喜んでくれる仕事をしたかったので、営業職で厳しい企業を選びました。これから、就職不況になり厳しさも増すと思いますが、あきらめないで、就職活動をしながら、自分がこうなりたいという将来像を見つけてみると効果的です。

卒業論文でも、こんな卒業論文にしたい、自分の興味あるテーマを選んでみるのが良いと思います。私は、音楽とインターネットの関連について興味があったので、卒論のテーマにしました。卒業論文を書いているうちに、音楽についてより興味が沸き、邦楽しか聴いたことがなかったのが、洋楽も聴くようになりました。

ところで、就職活動で失敗することもあるけど、失敗を教訓に次の機会に役にたてばいいと前向きに思うことが重要です。私の場合、訪問した企業をノートに何冊かにまとめていました。そのノートを読み返すと自分のやりたいことが見えてきたり、今まで頑張ってきた自分を見つめ直し、勇気をくれるはず。です。

無事に卒業ができるのは、藤井先生やゼミの皆との出会いがあったからこそ、私は卒論や就職活動に前向きにチャレンジできたといえます。本当に感謝しています。これから、卒論や就職活動が大変だと思いますが、新たな一歩に挑戦してみてください。ご健闘をお祈りします。

## 2年間で振り返って

太田 博幸

### はじめに

大学生生活において、藤井ゼミに入ったことはとても有意義なものであった。なぜならば大学3年生における授業選択を行う時に、すでに経過していた2年間で振り返ってみても以前勤めていた仕事を辞めてまで選んだ進学への道について、自信を持ってこの道を選んだことは間違いではなかったと自分に言うことが出来なかったためである。何か変化への取っ掛かりを求めているように思う。そんな時に、何気なく部活の繋がりで聞いていた学部の先輩などのアドバイスからゼミへの意欲といったものが湧いてきていた。ゼミを決めるに際し、先生によって指導をしっかりと行うものもあれば、放任的、適当なものもあると聞いていた。そういった中で自らの基準として、授業を受けてももっとも厳しそうな先生のもとで学びたいと考えた。

ゼミを持ついくつかの先生の講義を受け、もっとも興味を持ったのが藤井ゼミだった。印象的だった出来事が一つある。それは、授業を開始するために、先生が入ってくるなりPCの立ち上げを行い、いざ講義を開始するのかを思ったその時、「帽子を被っているやつはとれ！！」と一喝。今まで授業を受けてきて講義内で私語により騒がしくなった際、先生が静かにするよう注意する、というのが通例であった。

しかしながら、この先生は授業を行うにあたり生徒へも授業を受ける姿勢を求めていると感じた。「君たちがこの教室で講義を受けるからには、私が監督する責任をもっている。」さらに理由付けもしっかり行っているのではないか！これらの点から内容はともあれ、一緒にいた友人と一緒に受けようが受けまいが関係なく、この先生のゼミで学ぼうと決心した。上記のような説明を行ったところ、石井という友人は10月からカナダに留学するのも関わらず、一緒に授業を受けることを同意してくれた。

### ゼミ活動

ゼミ活動において主な活動といえば、3年生の前期では戦後日本の経済発展を論じること、後期の共同論文、4年における卒業論文といったものが挙げられる。

最初に、3年の前期課題とは、戦後日本の経済発展を与えられた資料や図を駆使して論じていくものであった。今までに受動的な学ぶといった事への姿勢から、あまり説明なく課題を与えられ自ら調べ、自らエクセルなどで作成した資料に基づいてGDPが上昇した要因や雇用が増加した要因を調べ論証していくというスタンスに面白みを持った。

また今まで文章を書いてこなかった、読書などを行ってこなかったツケのように、自分が書いていった文章を先生に添削されながらカミナリをもらい、返ってくる原稿状態をみてしっかりと文章を書けるようにならなければならないなど決心した。

ここでゼミの活動とは外れた内容になるが、他の授業での場面に少し触れたい。このころから他の授業へも成績が変化し出すことを感じるようになる。今までレポートなどを学期末や課題として出されれば、ただ文章を書いていくだけであったものから図表を入れ形式が明らかに変わったのである。この結果、ある授業では、レポートを提出したところ順位付けを行われ、1位のところに自分の学籍番号が表記されているプリントを配布され、これもゼミの成果だなど着実に変化を実感していた。

この授業の講師に話を聞きにいったところ、提出させた学生の中で図表を入れているだけでも1、2割しかいないという状況を教えてもらった。しかしながら、論理に突飛なものが多いとの指摘もあわせて受けた。7月にはなんとか提出することが出来たものの、まだ自らの文章力のなさに頭を抱え

ていた。改善するために、本を読む習慣を癖付けするように心がけた。今、振り返ってみればこの時期は、まだみんな女子も男子もそれほど話したりしていなかった頃だと思う。

夏休みが明け、共同論文（観光業における地域振興）をみんなで取り組むようになった。当初、前期に割り振っていた役割分担が、ゼミ員減少により当初の予定ではままならなくなった。各々、役割分担を再度振り分け、紆余曲折しながらみんなの助けを借りて完成させることが出来たと思う。

その後、春休みに予定していた京都へのゼミ合宿は、堀内さん、高橋さん、仲田さん、玉那覇さんが旅の計画を練ってくれた。今までに一度も京都に行っていない人もけっこうおり、大学に入ってからすでに2回行っていたが、明治維新の事を新選組、幕府側と行くごとにさまざまな面から見ていたため3回目といえ、ひそかに楽しみにしていた。

旅まで数週間というあるとき、先生が入院したというメールが届いた。当初、状況がわからず、旅行にいけなくなったという事よりも、4年次に先生がゼミを持つことが出来るのか心配した事もあった。学校が始まってみると、食事制限や運動に際して制限を設けられやや衰弱した感があった元気と言いが、生きている！！といった印象をうけた。

4年では、卒論を授業では行っていったが後で触れる。授業が始まって、一番の楽しみは、後輩がどのくらい入るかであった。いざ始めての授業を受けてみると、男子が3人だけといった状況であった…。自分の予想では、男子2人、女子も2人ぐらいいて新しい風が吹くのかと思いきや、翌週には男子一人。汐見くんの仲間入りであった。

昨年の経験もあり、そのうちこなくなるのかと思いきや全然辞める気配がない。むしろ徐々に溶け込んでいっていた。ゼミの活動外となるが、一井君、松村君、汐見君との4人で群馬県の伊香保に遊びに行った。朝、6時に集まり、マツケンが運転するノアに乗り、榛名湖で男4人、ぶらりボートに乗り、ちかくの牧場に寄りパターゴルフで白熱した勝負を繰り広げ、最後に温泉へ入り帰宅した。車の中で、マツケンの好きな声優の話になると、数時間はなしていられるのではないかと思える熱の入れっぷりに感心した。自分の好きなものは、周りになんと言われても辞めなさそうな心の強さを感じた。そんなマツケンは行きも帰りも運転を一人で乗り切り、帰りにサイドミラーを路肩に止まっている車にぶつけるといふ、車内が一瞬凍りつくような事態があったものの **nice driving tech** だった！今やいい思い出である。

また夏休みでは、4年男子3人呑みの席で汐見君が言った「夏休み富士山登るんですよ。」といった言葉に触発され、登ることを安易に決意した。いざ登ってみると、23時半ごろから頂上で御来光を見ようと目指し、登り始めたものの霊峰富士の峰は遠く長かった。。。夜空にたくさんの流れ星が、「流星の絆」みたいに流れていた。そんな中、最も若いはずのマツケンが、8合目付近で高山病により顔面蒼白となりダウンした。私自身9合目付近から、高山病でダウンしそうになり、休み休み登った。最も元気だったのが、一井君である。ダウンしている俺を横目に、ニヤつきながら彼女のためにムービーメールを作る余裕っぷりだ。

頂上到着後、富士山の火口で空手の構えを取ったかと思うと、いきなり大声で「藤井ゼミ最高、マツケン最高 etc…」大声で叫び、近くにいた老夫婦に笑われていた。一番年長でありながらも、こんな無邪気な一面を持つのが一井君の面白みというか魅力だと思う。夏の木曽路合宿でも、いきなり滝に撃たれたかと思ったら、さすが空手家、ここで空手の型を始め、みんなの驚きと笑いを誘った。

汐見君は、4年男子におけるネタの提供者であると言える。富士山だけでなく、フルマラソンに参加するというこのことを聞き、一時は本当に参加を考えるほどの影響力を持っていた。先生から月刊「ランナーズ」に汐見が載っているというメールをもらい仕事帰り本屋に寄ってみると眠そうに走っている姿が、大きく載っているではないか！！（笑） 何はともあれ、みんなに可愛がられる大事

な後輩である。

木曾合宿では、みんなの特徴が見られたと思う。玉那覇さんは、夜3時を過ぎて他の女子はみんな眠り、男連中がもう飲むのをほぼ辞めている中、さらに呑み続けられる酒豪っぷりを発揮し、独自の恋愛感をも語ってくれた。例えば、「人間であれば可」などなど。。高橋さんは、独自の視線から面白いネタを見つけ出し、みんなの空気を和ませたりしてくれた。特にデジカメを持たせるとすごかった！堀内さんは、みんなが飲んだ朝、誰よりも早く起きてきてお湯を沸かしたり、朝食の準備をしてくれ、人が嫌がりそうな事を自主的にしてくれた。また何かイベントがあると計画するのにいつも率先して動いてくれるのも堀内さんであった。ゼミ合宿の場所決めにしても、先生との調整やみんなの予定調整も一人でも取り組んでくれ、とても感謝している。仲田さんは、この合宿に参加することはできなかったが、日ごろのゼミ活動でも着実に講義に打ち込む真面目さを持ち、時々発せられる切れ味抜群のツッコミなんかを持っており、みんなそれぞれ個性を持って、思いやりのあるとてもいい仲間が集まったと思う。合宿中に、先生の寝顔を撮っていたはずをしつつ、堀内さんの服にカメムシが入った状況で「とって、とって」と言う声を逆手に写真を撮る先生のヤンチャっぷりもあり、笑いが常にあり楽しく過ごせた。

## 就職活動

私の就職活動におけるテーマは、「つなぐ」というものでした。人と人、人とモノ（環境、情報、有形・無形なもの）でした。これに基づいて、業界選びなども行っていった。就職活動に関して、多くの人（先輩、先生、友人、知人、企業の人事、親族など）から意見や考え方、方法といったものを教えてもらった。その中でも自分のベースとなったのが、当時、4年生であった佐々木先輩である。私が、就職活動を考えるようになったのは、3年生の10月であった。この時期、佐々木君は、リクルートスーツを着てゼミに出席しており、後期ぐらいから少しずつ話したりするようになった。ゼミが終わった後、白山駅に一緒に帰る際、終電間際まで就職活動の苦労話や取り組む姿勢、方法や対策といったものを伝授してもらったためである。

その中で今の覚えている言葉がある。「就職活動をするにつれて、多くの企業に出会い、自分がいききたいと思って受けて、成功、失敗といった結果が返ってくる。そんな時、結果を全て自分が悪いから、落とされたとは考えてはいけない。結局は、『その企業とご縁がなかった』だけ」のことという心構えであった。

落ちることだけを思い描き、取り組むことはもつてのほかだが、心のどこかで「就職活動は、必ずしも希望したところに入れるとは限らない」と思うことによって、かなりの余裕が持てたと思う。自分の行動に対して、必ず結果が伴ってくるのが就職活動であり、どこかの人事の言葉を借りれば、「就活は恋愛だ」といえるだろう。本当にその企業に行きたければ、落とされても何度も面接を受けに行くぐらいのガッツが必要だ！（ちなみに俺はやっていない。。）

就活において成功したときに、自らの成功を振り返らず、失敗したときには振り返るといったことを当初やっていたと思う。PACD（Plan＝計画、Act＝行動、Check＝検査・調査、Do＝実行）サイクルという方法を用いていた。しかしながら、これだけでは不十分だと思う。失敗したときに、行動を振り返るのは当然のこととして、成功したときにも成功できた要因があると就職活動を通し、気づいた。

例えるならば、当初、何を言おうとか、質問がきたらどう返答しようと考えていた。しかしながら、「何をいうかよりもどう言うか」ということが重要だとある機会に気づいた。失敗談的な話しであるが、面接を受けた企業の中で唯一人事の採用担当に保留にされた企業があった。保留にされた理由と

いうものが、まさに動物的な直感であった。人事の質問に、どれも無難にこたえられていたのだが、その人事はどうも首を斜めに傾け釈然としない面持ちであった。一通り質問を終えた後、数分間の沈黙を経て、口を開きたずねられた。「太田君は、本当にうちの会社に来たいと思っているの?」、さらに続けて、「どれも返答に筋が通っていて普通に聞いていれば納得する。けれども、面接慣れにも似た覚えた言葉を話しているせいか、感情とか意気込みが伝わってこない。」と言われるエピソードがあった。ここでもどっかの人事曰く、就活になれてくると若干嵌る学生がいると他の会社で言われたことを思い出した。

集団面接で一緒に受けたりする中で感じたものであるが、自信を持って答える言葉には、人を聞き入らせる力があると感じた。このエピソードの原因として質問された内容や、質問の答え方を30分以内にメモに残し、次に同じような質問がされたとき、うまく答えられるようまとめたりした。上記のような結果が生まれてしまったわけであるが、自分のモチベーションを面接前にあげておけば解消される事に気がついた。

私は幸い、自分の希望する業界を就職活動の序盤に見つけることができ、大学の図書館、インターネット、キャリア形成支援センター、企業説明会、同じ学生同士の話といった数多くの方法で情報を収集し、4月上旬に内定をもらうことができた。

だが、この後さらに新しい悩みは生まれた。今までは、「内定を取るためにどうすればいいか」といったものから、「本当にこの会社に入社していいのか」といった新しい視点が思い浮かぶようになってきたのだ。再び登場するが、内定をもらってから、まず佐々木君に報告した。その際に、併せて今の悩みを相談した。みんな企業を選ぶときに、なんらかの指標を持っていると思うが、「自分が満足するまで就職活動をして、この会社でいいと思える理由を見つけたら辞めればいい」とアドバイスを送ってくれた。

これをもとにあと十数社、同じ業界の会社の説明会や面接を受けたとき、自らの会社で積極的に事業展開を行っている企業もあれば、既存の分野を保守的に展開していく会社、保守的な柄も着実に事業展開を行っている企業があると視野を広げられた。私が、内定をもらった会社に後日、先輩社員に実際に働いている実感などを聞きに言った際、私は、大企業の子会社であるため事業移転などによって業務展開を行っている企業がある事を知り、この会社も同じかと思いきや、今まで独自に環境への取り組みとして事業創出してきた経験もあるという積極的な姿勢を聞き、この会社で働きたいと決心し、それまでの迷いや不安はなくなった。

いろんな人からの支えもあり、自らの就職活動が終わったことで友人へのサポートをしたいと考えられるようになった。なにか人を励ましたりできるようなことがあればという思いから、ゼミの飲み会で履歴書を見せ合ったりしつつ、励ましあったりもした。

このエピソードの中で、少し就活の壁にぶち当たっていた松村君へ誰からかの提案で、マツケンノートにみんなで思い思いの言葉を寄書きした。このような光景から、週一回、ゼミで顔を合わせあうだけの関係だったのに、いつの間にかかけがえのない仲間になっていたのだなと実感した。

以上のことから私の就職活動を通して、アドバイス出来る事はコミュニケーションの重要性である。自分自身とも他人、そして今までになかった範囲でのアクションが必要となる。3つに分けて考えてみた。①自分の行動をしっかりと見直す機会を持つこと、②困ったことがあれば、誰でもいいから悩みを共有することのできる人に相談すること、③たくさんの企業に足を運び、人事とたくさん会話をし疑問を解消し、情報を得ることである。そういったことの中から自分が将来、その企業・業界に入社したら何をしたいのか、具体的に思い描いていくことが重要であろう。そして何より楽しみをもって取り組めたら最高ではないだろうか。それが恋だったり、知的欲求の高まりだったり、何でもいい

と思う。就活のやり方は、十人十色であり正しいやり方なんてないのだから。

東大、早慶上智、筑波といった他の名だたる有名大学の人と同じ会社と一緒に面接を受けることになっても、自分の今までの経歴は拭い去ることはできず、気にしても始まらない。悲観してもいいが、悲観しすぎないことである。過去にあった大学入試の事を気にするのではなく、今を大事にしてほしい。

## 卒論

卒業論文を執筆するにあたり、最も悩んだものがテーマ決めである。テーマを決めるに際して、これから就職する非鉄金属業界のことを書こうかと悩んだり、売り手市場といわれている雇用について書こうかと悩んだりした。最終的に、ダイヤモンドなどの経済雑誌で多く取り上げられていた食糧問題にたどり着いたわけだが、それも簡単に食糧といってもテーマの内容を絞ることに苦労した。

テーマを絞りきれないまま発表するも、先生からテーマが漠然としすぎるとの指導をされ、書くよりも情報を集めようと考えた。図書館で食糧に関する本を借りて、読み進めていくと今度は情報の多さに混乱するようになった。他のゼミ員が順調に論文を進めていく中で、ひとり残されていくような焦燥感なんかあったように思う。結論にすることも決まらぬまま、ただひたすら書き並べるといった方法をとっていたように思う。

資料を集めるにもどうすればいいか当初わからずにいた。世界の食糧問題を扱うため日本では、アメリカ農務省やWTO（世界貿易機構）のデータをもとに農林水産省がデータを作成していたため、ほしいデータが直接出てくるといったことはなかった。

そのような中で、先生のアドバイスで「自分が論文を書く上で参考にする本をまず見つけること」といった事をきっかけに徐々に資料を集められるようになった。いわば芋づる式に道が開けたように思う。方法は、参考文献の図表の出典もとをインターネットから辿ったり、参考文献に、スーパーリンクやURL、出典を親切に表記してくれているものもあった。

夏休みに行われたゼミ合宿では、中間発表をすることになっており少しずつ準備を進めていったものの、未だにテーマも結論をどう位置づけるか定まらずにいた。そのような状態だったため、ゼミ合宿では先生の友人も来るというため酔い潰して中間発表をなかったものにしようとい井君や堀内さんを筆頭にみんなで計画していた。しかし、そこで見事に先生は、私たちの計画通り大量の酒を飲むものの、酒には飲まれず発表の添削をした。しかし、先生友人がいなくなった二日目には添削は行われなかった。やはり友人の手前、プロとしてのプライドが酒に吞まれず添削をしたのかなと思ったりした（笑）なにより先生は疲れていたと思う。

この時、添削してもらった結果定まっていなかった方針が徐々に決まってきたように思う。その後、九月下旬にUSBの故障により全てのデータがなくなり、一時放心状態になったこともあったが、先生や井君からメールをもらい、気持ちを入れ直した。だが、今まで集めてきたデータまでもなくなったことが、なによりダメージを受けた。また英文サイトを再度調べていくことを想像すると、正直辞めたくなかったのは後にも先にもこの時だけである。

2ヶ月の間に資料を集め、文章を書くことがどれほどの労力を要するか当初見くびって考えていた。いざ取り組んでみると、なかなか再び資料を集めるだけでも1ヶ月強も要し、さらに平行して文章も書くには1日、10時間PCの前に座っていても1,000文字前後もかけないことが5,6週間続いた。

また仕事の同僚の院生から、「論文を書く以上報告形式で書いたものは、論文とは言わない。書くからには何か通説とかを批判しないとイケない。」との指摘をもらい、おぼろげながら方向性が定まった。今まで結論をどのように書くか悩んでいたが、大学で学んできた知識を思い出し、社会学にパニ

ックというものがあつた事を思い出した。今の食糧価格の高騰とは、一種のパニックなんじゃないかという疑いの目を持つことを出来るようになった。時を同じく(?)して、食糧価格、資源価格は急降下していった。提出期限までにはなんとか論文を完成させられた。

卒論提出後のゼミ飲みでは、藤井先生の論文を通しての指導方針の意図を知った。「社会にでると誰からか習うのではなく、自ら学ぶ姿勢が必要になる。学生最後の卒業論文というものを通して学ぶ姿勢を培ってもらいたかった。」というようなニュアンスの言葉を聞き、たとえこの言葉を聞かなかったとしても、3年のゼミ選びは間違いではなかったと胸を張って言える。

## 最後に

数多くのものをゼミによって得ることができた。ゼミの最初の授業で、藤井先生が、「大学4年間で何をしてきたか言うのに、部活やサークル、バイトだけじゃ寂しすぎる。やはり、大学に入った以上ゼミをやらなければ」といったようなことを言っていた事を思い出す。本当にいいゼミだったなと思う。

2009年4月から、みんなそれぞれ新しいスタートを切る。いつか就職とか結婚、家庭を持ち時間が経って色々変わるものは多いけど、それぞれの場所で変わらず元気に過ごしていけるよう願っています。最後に思いつきで入れてみました(笑)。

雨にも負けず  
風にも負けず  
雪にも夏の暑さにも負けぬ  
丈夫なからだをもち  
慾はなく  
決して怒らず  
いつも静かに笑っている  
一日に玄米四合と  
味噌と少しの野菜を食べ  
あらゆることを  
自分を勘定に入れずに  
よく見聞きし分かり  
そして忘れず  
野原の松の林の陰の  
小さな萱ぶきの小屋にいて  
東に病気の子供あれば  
行って看病してやり  
西に疲れた母あれば  
行ってその稲の束を負い  
南に死にそうな人あれば  
行ってこわがらなくてもいいといい  
北に喧嘩や訴訟があれば  
つまらないからやめろといい  
日照りの時は涙を流し

寒さの夏はおろおろ歩き  
みんなにでくのぼーと呼ばれ  
褒められもせず  
苦にもされず  
そういうものに  
わたしはなりたい